國學院大學学術情報リポジトリ

『謙斎南渡集』と『策彦入明記』の関わりについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): Kensai nan'doshū, Sakugen nyūminki, Chinese poems, complementarity 作成者: 陳, 茜 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001620

『謙斎南渡集』と『策彦入明記』の関わりについて

Exploring the Relationship between *Kensai nan'doshū* and *Sakugen nyūminki*

陳　　茜

キーワード：『謙斎南渡集』『策彦入明記』　漢詩　補充
Keywords: *Kensai nan'doshū*　*Sakugen nyūminki*　Chinese poems　complementarity

要旨

『謙斎南渡集』は策彦周良が中国での旅を記録した漢詩を126首収録するものである。『策彦入明記』は策彦周良の中国での旅日記だといえる。『謙斎南渡集』における34首の漢詩は『策彦入明記』にも収録されているが、若干の詩句の相違が存在する。『謙斎南渡集』における62首の漢詩は『策彦入明記』に記録されていないが、関係している遊覧と交際記録がある。『謙斎南渡集』における30首の漢詩は『策彦入明記』に記録されていないし、関係する遊覧と交際記録も残っていない。この部分のある漢詩に関して、他の史料に関連の記録が見られる。一言に言えば、『謙斎南渡集』と『策彦入明記』は互いに補充し、策彦周良の中国での旅をより深く把握することができる。

Abstract

Kensai nan'doshū is a collection of 126 Chinese poems written by *Sakugen Shūryō* recording the experience of coming to China, while *Sakugen nyūminki* is his travel diary at that time. 34 Chinese poems are recorded both in *Kensai nan'doshū* and in *Sakugen nyūminki*. But there are slight differences in a few lines between them. 62 Chinese poems in *Kensai nan'doshū* are not recorded in *Sakugen nyūminki*. But there are records of relevant visits or contacts with Chinese literati in *Sakugen nyūminki*. The remaining 30 Chinese poems only in *Kensai nan'doshū* have no records of relevant visits or contacts with Chinese literati in *Sakugen nyūminki*. So they need to be found in other historical materials left by *Sakugen Shūryō*. In short, *Kensai nan'doshū* and *Sakugen nyūminki* complement each other to understand *Sakugen Shūryō*'s journey in the Ming Dynasty of China more deeply.

はじめに

策彦周良（1501-1579）は字を策彦、名を周良、別号を怡斎（後に謙斎と変更）といい、室町時代の天龍寺妙智院の三世であった。策彦周良が遣明使として二回渡明し、その経歴を詳しく記録した。それは『策彦入明記』として知られている『初

渡集』と『再渡集』である。その中には、文化、政治、経済などに関わる内容が含まれている。『謙斎南渡集』[1]は策彦周良が中国での履歴を記録した漢詩を摘録するものであり、概ねに寧波から北京へ北上した順で編集された。中国文人に次韻した漢詩や、中国の歴史名跡と山川を唱えた漢詩、故郷を偲んだ気持ちを表した漢詩、仏教偈などは中国での豊富的な体験が書かれている。『謙斎南渡集』と『策彦入明記』[2]は共に策彦周良の中国での旅を記録したものであるので、両者の間にどのような関係を持っているのか？『謙斎南渡集』における漢詩は『策彦入明記』の中にも記されているのか？『策彦入明記』の詳しい情報を通じて、『謙斎南渡集』における漢詩の創作背景を把握できるのか？残念ながら、管見の限り、今まで学界ではこの問題にあまり関心を寄せていない。『謙斎南渡集』と『策彦入明記』の関係を明らかにするのは『謙斎南渡集』の編集過程と目的、標準などを究明することになる。本稿では、『謙斎南渡集』における漢詩は、『策彦入明記』にも明記されているもの、明記されていないが関係記録があるもの、完全に触れていないものという三つの状況に分けて考察してみたい。

一、『策彦入明記』にも記録された漢詩

（一）概況

『謙斎南渡集』の漢詩が『策彦入明記』にも収録されたのは34首ある。その漢詩と『策彦入明記』に記録された時間は以下の通りである。

表１　『謙斎南渡集』と『策彦入明記』の両方に収録されている漢詩

番号	『謙斎南渡集』における詩題	『初渡集』日付
1	和韻呈張大人執事下（増補）	嘉靖十八（天文八，1539）年八月二十八日
2	和靖讀書台（増補）	嘉靖十九（天文九，1540）年八月廿五日
3	二號船孤竹老人寄一絕，聊次厥韻	嘉靖十八（天文八，1539）年五月十一日
4	賡寧波府竹所大人見寄吾友珠宣公之韻以同酬	嘉靖十八（天文八，1539）年七月二日
5	趙一夔大人前日忝賜尊詩，再誦三讀，舒又卷卷又舒，何惠加焉。邇來官事紛紜，弗遑裁答似慢乎。聊綴蜂腰強續貂尾云	嘉靖十八（天文八，1539）年七月十九日

(1)　『謙斎南渡集』は『妙智院所蔵史料』（東京大学史料編纂所写真帳）による。
(2)　『策彦入明記』は『妙智院所蔵史料』（東京大学史料編纂所写真帳）所収の策彦周良の自筆本『初渡集』と『再渡集』による。

6	維時七月，到夜炎熱酷，客睡不安，月色如晝。時聞砌下蛩聲，與吾邦蛩聲無異，不克靡感於懷，聊作此詩	嘉靖十八（天文八，1539）年七月十九日
7	謝范南岡齋酒肴來訪	嘉靖十八（天文八，1539）年七月廿一日
8	遊月湖之次，詣會泉大人。謝昨日袖詩來，輒和前韻以二篇（2 首）	嘉靖十八（天文八，1539）年七月廿一日
9	古岩大人有令子，頃喪其母，贈一偈以助其哀云	嘉靖十八（天文八，1539）年七月廿七日
10	南滄老人向賜同韻詩二章，宛如錦上花束，而附韻尾者一絕。余日夜侍天詔之降，故末句及之，以投幾右云	嘉靖十八（天文八，1539）年七月廿八日
11	南滄老人復見寄五言詩篇，再和而遣懷云	嘉靖十八（天文八，1539）年七月廿八日
12	張東津大人未面，先有書簡之賚，作詩以謝之	嘉靖十八（天文八，1539）年七月廿九日
13	錢龍泉大人來問，筆談移時。予將出酒盃，大人再三辭之，故以吾邦宇治茶代之，座已終，大人歸去。黃南原繼踵而來，携一少年，云此兒昔蘇玉堂所親李節推遙遙華胄也，為令慰翁旅寓引之而至。云云。少年自袖中出詩一篇付予	嘉靖十八（天文八，1539）年閏七月朔旦
14	予駐錫於寧波之府六旬餘，聞柯雨窗之名，不識雨窗之面，造次顛沛仰慕惟深矣。新涼入郊之頃，適有蒼頭捧一緘來，披而視之，見和余投范氏詩之佳作也，蓋唐人句法、晉人楷法出一手者。且復副以新畫一幅、古文兩策，余獲此三絕，十襲而秘，何賜加焉。吁未晤對之，先眷惠如此，何況一往一來之後哉？古人以畫詩書為三絕，則文策其餘波之及也。非可默止，磨瓦礫代瓊瑤之報云	嘉靖十八（天文八，1539）年閏七月五日
15	趙一夔先生來遇，惠以桃果，果大合吾邦三桃實，風味亦別也。先生游累刻，乞筆硯，親書“閏七夕”三字，需詩於余，余綴曰	嘉靖十八（天文八，1539）年閏七月七日
16	俾館夫王鐺（鏜）呈金紫光録大夫陸亶大人	嘉靖十八（天文八，1539）年閏七月五日
17	新篁翁有悼孤竹老人之一偈矣，余與老人有青眼之舊者久矣，依厥韻遣哀傷云	嘉靖十八（天文八，1539）年閏七月十日
18	連日秋雨不停，客窗素月不來。聊築小詩之城，以遣鬱懷云	嘉靖十八（天文八，1539）年閏七月十五日
19	昨夜及三更，夢梅樹大者，枝枝交參，標格可見。未著花萼，不知何兆。余卒綴野詩，遠獻北野聖君	嘉靖十八（天文八，1539）年閏七月十九日

20	夜來鄉志曲折，耿不安枕。時將徹曉，余適哦老杜“秋天不肯明”句之頃，樂音琅琅然，起自外面，頓有陽春沖融之氣，使人散羈憂。凡中州之為州，千歲之下周孔禮義行世。雖樵豎牧童之口，唯非聖道則不談。及禮葉將秋，復有樂花回春，所感弗俾吾邦平生久要視此禮樂之美。感歎無措，作詩遣懷云	嘉靖十八（天文八，1539）年八月十一日
21	二號船船頭河上杢為三艘祈禱，修懺摩一座，余副使、從僧、兩居座、土官以下為請眾矣。齋了施浴，新篁翁於室中作頌，余即衝口而和云	嘉靖十八（天文八，1539）年八月十八日
22	四明有先生號梅崖，蓋以楷法鳴中華者也。其人和氣溫然，如春在花，實明道疊山流亞乎？一日訪余於旅館之頃，需綴卑作漬美稱。弗獲險拒，裁二章塞其請云（1首）	嘉靖十八（天文八，1539）年八月廿四日
23	梅崖雲冠大人手親寫墨竹一兩莖，添有聲畫以贈焉。其畫取“英明清”三字為軸子，即時和章而謝之	嘉靖十八（天文八，1539）年八月十九日
24	中秋之夕對月遣興	嘉靖十八（天文八，1539）年八月十九日
25	鏡清寺	嘉靖十八（天文八，1539）年八月廿日
26	晚過西湖（1首）	嘉靖十八（天文八，1539）年十一月八日
27	楓橋	嘉靖十八（天文八，1539）年十一月十六日
28	再渡之時復上金山寺	嘉靖十九（天文九，1540）年八月五日
29	邵伯廟	嘉靖十八（天文八，1539）十二月十三日
30	除夜（2首）	嘉靖十八（天文八，1539）年十二月三十日
31	楚項羽廟	嘉靖十八（天文八，1539）年十二月三十日
32	進履橋	嘉靖十九（天文九，1540）年正月四日

表1の通り、中国文人に次韻した漢詩は18首あり、だいたいその半分をしめている。また、中国の風景を満喫した漢詩は7首あり、その5分の1を占め、述懐の感情を表した漢詩は7首あり、中国で亡くなった友人である孤竹を悼んだ偈は1首ある。中国文人は主に寧波の田紳に集中し、中国の景色は寧波から北京への沿岸の歴史名跡や西湖などである。創作時間について、ほとんどは嘉靖十八年であるが、「和靖讀書台」、「再渡之時復上金山寺」、「進履橋」という三首は嘉靖十九年に作られた。全体的からみれば、この部分の漢詩は策彦周良が明朝に初渡した時に集中していると言えよう。

（二）詩句の相違

『策彦入明記』における詩句と比較すると、『謙斎南渡集』の詩句には若干の差がある。詳細は表２のとおりである。

表２　『謙斎南渡集』と『策彦入明記』における詩句の相違

番号	『謙齋南渡集』における詩題	『謙齋南渡集』における詩句	『策彦入明記』における詩題	『策彦入明記』における詩句
1	賡寧波府竹所大人見寄吾友珠宣公之韻以同酬	未見清容意先足， 風流文物久聞諸。 呼為天下奇男子， 況稱世南行秘書。 愧我胸襟無一字， 知君早歳惜三餘。 冰霜志操可消夏， 雲水生涯不愛廬。 盟約若修同竹馬， 歸期何必在蓴鱸。 中華若木莫言遠， 紅日朝朝照碧虚。	卒奉攀竹所尊翁見寄吾友珠宣之高韻，怡齋散釋拜稽	未見清容意先足， 風流文物久聞諸。 呼為天下奇男子， 況稱世南行秘書。 愧我旅程無一物， 知君早歳惜三餘。 冰霜志操可消夏， 雲水生涯不愛廬。 盟約若修同竹馬， 歸期何必在蓴鱸。 中華若木莫言遠， 紅日朝朝照碧虚。
2	謝范南岡齎酒肴來訪	感君携酒慰煩襟， 交義未深恩渥深。 預恐歸期惱離思， 他鄉亦有故人心。	齋後訪范大人，大人出迎一笑。陳嘉肴，酌美酒，又圍棋三戰。予獻詩謝前日來訪	感君携酒慰煩襟， 交義未深恩渥深。 預恐歸期忘歸興， 他鄉亦有故人心。
3	遊月湖之次，詣會泉大人，謝昨日袖詩來，輒和前韻以二篇	景自月湖晴後清， 只疑身在畫圖行。 再遊眷眷訪君處， 欲續佳篇愧客程。	次遊月湖，詣會泉大人，蓋謝前日來訪。携以隻金扇一把，且復和前韻	景自月湖晴後清， 只題身在畫中行。 再遊眷眷訪君處， 欲續佳篇慚旅程。
	古岩大人有令子，頃喪其母，贈一偈以助其哀云	五十餘年四大床， 無陰陽地涉陰陽。 金風體露生鐵面， （吾翁宣偈頒香後） 妝鏡臺成正覺場。	古岩有令子，頃喪其妻。正使和上贈偈一首、香一瓣見悼，予亦依韻助哀。謹依正使湖心大禪師華偈之韻，追悼曹娘掩粧云	二十餘年四大床， 無陰陽地涉陰陽。 吾翁宣偈頒香後， 妝鏡臺成正覺場。
4	張東津大人未面先有書簡之賚，作詩以謝之	未見清容先識心， 書中下觜勝明箴。 （昨來慰寂寄嘉音） 講交若入文章社， 寸刻唯應直萬金。 （一諾唯應直萬金）	價於豪忠，寄詩于戴、張、錢三秀才，蓋謝前日書問也	未見清容先識心， 昨來慰寂寄嘉音。 講交若入文章社， 一諾只須輕百金。
5	錢龍泉大人來問，筆談移時。予將出酒盃，大人再三辭之，故以吾邦宇治茶代之，座已終，大人歸去。黄南原繼踵	茫茫萬里發扶桑， 秉志來觀上國光。 乳燕出巢成矣翼， （果是車書同四海） 一宵願染衲衣香。	黄南原携一少年來，特投以詩，詩云	茫茫萬里發扶桑， 秉志來觀上國光。 果是車書同四海， 加沙端染御爐香。

	而來，携一少年，云此兒昔蘇玉堂所親李節推遙遙華胄也，為令慰翁旅寓，引之而至。云云。少年自袖中出詩一篇付予	(袈裟端染御爐香)		
6	予駐錫於寧波之府六旬餘，聞柯雨窗之名，不識雨窗之面。造次顛沛，仰慕惟深矣。新涼入郊之頃，適有蒼頭捧一緘來，披而視之，見和余投范氏詩之佳作也，蓋唐人句法、晉人楷法出一手者。且復副以新畫一幅、古文兩策，余獲此三絕，十襲而秘，何賜加焉。吁，未晤對之，先眷惠如此。何況一往一來之後哉？古人以畫、詩、書為三絕，則文策其餘波之及也。非可默止，磨瓦礫代瓊瑤之報云	先識才名未見君，(久識才名未遇君)願聞清話解塵紛。(何當清話解塵紛)一朝贈我餘三絕，(一朝贈我以三絕)齎畫詩書齎古文。(新書新詩又古文)	作詩寄柯雨窗，蓋謝前日嘉貺也。嘉亥之夏，吾邦有修貢之事，余亦贅諸官之列，而來觀上國之光。於是乎，駐錫於寧波之府六旬有餘，音容相接者或有焉或不焉。久聞雨窗之名，不識雨窗之面。造次顛沛，仰慕惟深矣。新涼入郊之頃，適有蒼頭捧一緘來，披而視之，見和余投范家詩之佳作也。蓋唐人句法、晉人楷法出一手者乎。且復副以新畫一幅、古文兩策，余獲此三絕，十襲而秘，何賜加焉。吁，未晤對之，先眷惠如此。何況一往一來之後哉？古人以畫、詩、書為三絕，今者畫也，詩也，文集也。其二同中有同，其一異中有同，不愧為他年故事。余蜂雀於詩，蚓蛇於書。口將吟而澀糊，手將臨而停輟。雖然俯默而止，則何以償贈酬乎？強呈一絕，索一笑云	久稔才名未遇君，何當清話解塵紛。一朝惠我以三絕，新畫新詩又古文。
7	趙一夔先生來遇，惠以桃果。果大合吾邦三桃實，風味亦別也。先生遊累刻，乞筆硯，親書“閏七夕”三字，需詩於余，余綴曰	送七宵重迎七宵，女牛愁自閏餘消。天如借一隻烏鵲，用作人間再渡橋。(汝作人間再渡橋)	正使和上設詩會，以《閏七夕》為題，拙詩記之。	送七宵重迎七宵，女牛愁自閏餘消。若天借一隻烏鵲，汝作人間再渡橋。
8	俾館夫王鐺(鐺)呈金紫光録大人陸亶大人	聖朝久息兵， 無處不昇平。 進拜待明詔， 遠來抽赤誠。	賡前韻俾館夫鐺呈陸亶。	聖朝久息兵， 無處不昇平。 進拜待明詔， 遠來抽赤誠。

		李圓方外友, 陸遠社中盟。 君玉鞍我屢, (君若許同志) 推敲約送迎。 (何曾談利名)		李圓方外友, 陸遠社中盟。 君若許同志, 何曾談利名。
9	二號船船頭河上杢為三艘祈禱, 修懺摩一座。余副使、從僧、兩居座、土官以下為請眾矣。齋了施浴, 新篁翁於室中作頌, 余即衝口而和云	奴視揚州陰子春, 當年忍垢是何因。 宣明妙觸圓通水, (祖園分得溫湯水) 一洗人人客舍塵。 (離卻人人腳下塵)	早旦, 二號船頭河上杢待正使和上及予、從僧、以下兩居座、一土官亦光伴。初獻雜煮, 二獻布吸物 , 三獻蔓草吸物, 四獻羊羹, 五獻點心饅頭。點心了, 修懺一座, 蓋為三艘祈禱也。正使導師, 三英香華, 余自歸。懺了小齋, 酒三行而止。齋了施浴, 蓋杢左新構風呂。風呂了, 設一瓶、一籠於浴室之傍, 浴眾次第喫酒而退。正使於浴室作頌, 韻腳“大倭春”、“悟水因”、“叫無塵”, 予即衝口而和, 和云	奴視揚州陰子春, 當年忍垢是何因。 祖園分得溫湯水, 離卻人人腳下塵。
10	四明有先生號梅崖, 蓋以楷法鳴中華者也。其人和氣溫然, 如春在花, 實明道疊山流亞乎？一日訪余於旅館之頃, 需綴卑作漬美稱。弗獲險拒, 裁二章塞其請云	梅花標格點無塵, 最映江南野水濱。 俗紫凡紅望崖郤, 一枝別置四時春。	寄梅崖詩。 四明有先生號梅崖、姜一, 以書鳴中華者也。其為人和氣, 溫然如春在花, 可謂名下無虛士矣。一日訪余於旅館之頃, 需綴卑作瀆美稱。弗獲嶮拒, 強塞請云	梅花標格點無塵, 掩映江南野水濱。 俗紫凡紅望崖郤, 一枝別置四時春。
11	梅崖雲冠大人手親寫墨竹一兩莖, 添有聲畫以贈焉。其畫取“英明清”三字為軸子, 即時和章而謝之。	是翁筆力萬人英, (多君筆力萬人英) 鐵畫銀鉤冠大明。 猶有鄭虔三絕在, 畫圖詩句備員清。 (畫圖詩句一般清)	三英訪梅厓, 梅厓于時寫墨竹一兩莖, 題小詩於其上以贈焉。其韻押“英”、“明”、“清”三字, 余代三英裁和, 和云	多君筆力萬人英, 鐵畫銀鉤冠大明。 猶有鄭虔三絕在, 添詩添畫一般清。

表２に以下の三点に注目したい。その①は『謙斎南渡集』における若干の詩句は『策彦入明記』における詩句と全く違うということである。その②は『謙斎南渡集』における若干の漢詩は二種類の詩句があり、その一種が『策彦入明記』と一致することである。以上の２点から見れば、妙智院本『謙斎南渡集』における語句はもともと『策彦入明記』における語句と大いに異なっており、伝わってきた過

程に誰かによって妙智院本『謙斎南渡集』のもとの語句の傍らに、『策彦入明記』における語句などの異文を添えたと理解できる。その③は『謙斎南渡集』における記録は『策彦入明記』と異なることである。例えば、「古巖大人有令子、頃喪其母、贈一偈以助其哀云」という漢詩は、『策彦入明記』で「古巖大人有令子、頃喪其妻」と明記されているので、一字の差でその人の年齢は雲泥の差となった。なぜこの相違が生じるのか、編集者が「令子の妻」を「古巖大人の妻」と誤解したため、「令子の母」に変更したという可能性があると思われる。一方、『策彦入明記』を通じて、『謙斎南渡集』の漢詩の創作背景をより明確に把握でき、その漢詩をもっと深く、正確的に理解することに役立った。例えば、「梅崖雲冠大人手親寫墨竹一兩莖，添有聲畫以贈焉。其畫取 “英明清” 三字為軸子，即時和章而謝之」という漢詩は『策彦入明記』によれば、策彦周良が中国文人である梅崖に唱和したものではなく、叢僧である三英梵生に代わって、策彦周良が創作したものだと分かった。

二、『策彦入明記』には関係記録がある漢詩

『謙斎南渡集』における一部分の漢詩は『策彦入明記』に明記されていないが、その関連の人物と遊覧経歴が記されている。この部分の漢詩はほぼ中国の山川を満喫したことを描いたものである。幾つかの例を挙げてみよう。

（一）西湖付近の風景

『謙斎南渡集』の中で、西湖付近の風景を描写した漢詩は「保叔寺」、「同寺有八角塔婆」、「到浄慈寺上宗鏡閣」、「霊隠寺」、「同上飛来峰」、「中天竺寺」、「仏足泉」、「徑山寺」などある。策彦周良が杭州を通過したのは四回あり、『策彦入明記』の中でその三回を記録した。詳細は以下の通りである。

①嘉靖十八（天文八，1539）年十一月朔日[3]
　自西門歴**西湖之涯**，到船邊，時方日及晡。
　嘉靖十八年十一月八日[4]

(3)　牧田諦亮『策彦入明記の研究』上（仏教文化研究所，1955年）p104
(4)　牧田諦亮『策彦入明記の研究』上（仏教文化研究所，1955年）p104

又前日過**西湖**之頃，照沈霧暗，不能見風景，嗟恨之餘作詩，孤吟未了，故未記焉。今寫於此，示不忘云。
日玆暮矣興何佳，暗度西湖湖水涯。
眼似老年看不見，六橋風景霧中花。

初渡で北上し、杭州を通過した時、十一月一日に遣明使がようやく杭州城内に入った。策彦周良が当地の官員を謁見した後、夕方に西湖の付近に到着した。暗くの中で、西湖が朦朧と見えた。残念のあまり、策彦周良が漢詩を作った。八日に、日記で忘れないようにその漢詩を記した。

②嘉靖十九（天文九，1540）年九月三日[5]

未刻，自清波關出到**西湖之崖**。於山於水，佳絶可愛。六橋之影，湖心横幾虹。湖面或畫船、或漁舟，不知其數。所恨公程忽忽，逐一不印履于山隈水涯，三天竺、靈隱、淨慈等之諸寺，孤山、蘇境、六橋之煙景，如畫圖中物，但望梅林止渴耳。就中，孤山乃林和靖隱處也，至今三賢堂巋然存，堂中塑白傅、東坡、和靖三像，所謂三賢是也。淨慈乃畫僧玉澗棲遲之寺也，七層塔影輝映山光水色。又上天竺之層塔，屹立於山之絶頂，余舊年在海東見其圖，今見其真，頗增感慨。申刻，歸本船。

二回目に西湖を遊覧したのは初渡の北京から寧波へ帰った途中で杭州を経由した時である。九月三日の未刻（午後1-3時）ごろ、西湖に到着した。三、四時間遊んでから申刻（午後3-5時）ごろに貢船へ帰った。今回も足早に孤山、三賢堂、浄慈寺、上天竺寺などの西湖風景を観光した。

③嘉靖二十七（天文十七，1548）年十月晦日[6]

曉戴星出本驛，遊**西湖**。自北山山下乘扁舟，第一道淨慈寺，于宗鏡堂後永明室內下飯，經六橋，歷覽諸寺。始於淨慈，終於大佛寺。取歸途於北山山頂，再游保叔寺。

(5) 牧田諦亮『策彦入明記の研究』上（仏教文化研究所，1955年）p148
(6) 牧田諦亮『策彦入明記の研究』上（仏教文化研究所，1955年）p240

三回目は再渡の寧波から北京へ北上した途中で杭州を訪れた時である。前の二回の遺憾を補うため、星を戴いて出で西湖を遊覧した。まず、浄慈寺から、大仏寺まで見物しており、途中で浄慈寺の宗鏡堂で食事し、諸寺を遍歴した。帰り道に北山山頂の保叔寺を観光した。

上述から見れば、浄慈寺の宗鏡閣、霊隠寺、霊隠寺の飛来峰、保叔寺、保叔寺の八角塔婆、中天竺寺、上天竺寺の仏足泉、徑山寺などは策彦周良が再渡の時、十分に見物した所だと推察される。そのことから、「保叔寺」、「同寺有八角塔婆」、「到浄慈寺上宗鏡閣」、「霊隠寺」、「同上飛来峰」、「中天竺寺」、「仏足泉」、「徑山寺」という漢詩は策彦周良が再渡した時に創作された可能性が高いと言えよう。

（二）「寒山寺」、「寒山井」、「拾得井」

『策彦入明記』の中で策彦周良は寒山寺を二回遊覧した経歴について詳細に記している。以下の通りである。

①嘉靖十八（天文八，1539）年十一月十六日[7]

辰刻，遊**寒山寺**，舟行七里。寺乃面於西南，門額朱漆金字也，里豎掲“寒山寺”三大字，額面左方有“處州顧榮書”五字，右方有“住山文澤立”五字。佛殿横掲“大雄寶殿”四大字，本尊安釋迦尊像於中央，左無量壽佛，右彌勒尊佛。又其交左有迦葉破顔之像，右有阿難隨侍之像，又有十六羅漢像。堂外東隅有鐘樓，無華鯨。佛殿里東南之隅掛一鐘，所謂夜半鐘也，鐘銘有“佛日增輝”、“法輪常轉”、“皇圖永固”等之語。本尊面前有牌，書“皇帝萬萬歳”五大字。殿之後有方丈，掲“方丈”二大字。過一院，院長出迎相揖，遂設榻侑茶。有小堂宇，左右之柱書“香燒柏子延三寶”、“漏刻蓮華禮六時”十四字。

②嘉靖十八年十一月十九日[8]

午刻，携三英、熊松**再遊寒山寺**，蓋要詳訪事蹟也。佛殿後有堂，堂里横顔“方丈”二大字，脇有“住山永恩立”五字。又其後堂按寒山、拾得二木

(7)　牧田諦亮『策彦入明記の研究』上（仏教文化研究所，1955年）p105
(8)　牧田諦亮『策彦入明記の研究』上（仏教文化研究所，1955年）p106

像，左寒山，右拾得。又像左方有幢，書以“南無文殊師利寒山菩薩”十大字，又右方書以“南無大行普賢拾得菩薩”十大字。堂前壁間書“松風清客座”、“花雨濕禪關”之句。又過一院，院主出應茶話，予乞筆研書楓橋偶作。院壁書“茶話情懷好”、“菜根滋味長”之句。又柱書“寺古存仙跡”、“僧閑伴鶴眠”之句。歸時，假道於楓橋上本船。

①②の述べるように、一回目に策彦周良が主に寒山寺の仏殿と殿後の方丈を訪ねた。三日間後、策彦が寒山と拾得の物語を訪ねるため、もう一回寒山寺に行った。今回は寒山と拾得の木像を安置していた堂を尋ねた。

『謙斎南渡集』の漢詩に戻りたい。「寒山寺」の題の下に「殿之上面安寒山、拾得二像，像形與畫圖無異矣。左右立二牌：“南無寒山文殊師利菩薩”、“南無拾得普賢行願菩薩”。」という注が書かれている。この注における牌の内容は『策彦入明記』と多少の違いがある。『策彦入明記』には「南無文殊師利寒山菩薩」と「南無大行普賢拾得菩薩」と書いてある。なぜこのミスが生み出されたのか、多分記憶違いのためであるかもしれない。策彦周良があるところを遊覧したとき、即興に漢詩を創作したという習慣があるから、「寒山寺」という漢詩は策彦周良が二回目に寒山寺を遊覧した時、即ち十一月十九日に創作された可能性が高いと推測できる。

また、「寒山井」の題の下に「寺僧云：山中及旱，則動無水，寒拾穿二井而為遺物。」という注が書かれている。寒山井と拾得井は『策彦入明記』に明記されていない。だが、寒山と拾得の木像を安置していた堂があれば、そのあたりは寒山と拾得が生活していた所に違いない。ゆえに、寒山井と拾得井はその堂のあたりにあったと思われる。それに、「寺僧」から聞いた寒山井と拾得井に関する逸話は策彦周良が十九日に院主と語り合ったことだと思われる。

このように、『策彦入明記』には『謙斎南渡集』における一部分の漢詩が収録されていないものの、『策彦入明記』の関係記録を通じて、漢詩の創作時間と背景を把握できると思われる。

三、『策彦入明記』には関係記録がない漢詩

『謙斎南渡集』における30首の漢詩は『策彦入明記』にも明記されていないし、関係記録もない。詳細は表3にまとめた。

表３　『策彦入明記』には関係記録がない漢詩

番号	『謙斎南渡集』における詩題
1	副使竺裔遊天童山，於密菴塔有偈，次其芳韻（増補）
2	薛蘭室先生有詩，即次其韻（増補）
3	賜筵宴之翌日，伴送官李大人作川八見寓賀忱，聊贅其韻以奉謝聖恩萬乙云（増補）
4	洋中遣鬱懐
5	洋中始見大唐之山
6	徑山寺
7	長安驛
8	鶴林寺
9	舟中値立春
10	王祥孝河
11	齊桓公廟
12	宋太祖廟
13	桃花口
14	入燕京參內
15	皇帝御賜詩
16	應制和御詩
17	奉敕見花萼樓牡丹
18	再渡唐參內獻野詩
19	賜御和
20	四月二十三日于上林苑賜宴（6首）
21	上林苑會拙作，翌日達明聰，龍顔改觀而賜御和
22	曲江
23	雁塔
24	再渡唐之時，歸寧波府，謝南寓外史豐解元制予『謙齋記』文
25	初渡之時於洋中賦一絶

なぜこの部分の漢詩は策彦周良が中国での旅を記録したものであるのに、『策彦入明記』には関係記録が残っていないのか？

筆者は策彦周良に関する史料を調査するうちに、『妙智院所蔵史料』における『明国諸士送行』という史料が『謙斎南渡集』における「賜筵宴之翌日，伴送官李大人作川八見寓賀忱，聊贅其韻以奉謝聖恩萬乙云」という漢詩と密接な関係を持っていると発見した。『明国諸士送行』は明の人から策彦周良に送られた八通の文書からなっている。その中で淮山居士が送った書状が一通ある。内容[9]は以下の通りである。

(9)「淮山居士書状」の翻刻は『妙智院所蔵史料』（東京大学史料編纂所写真帳）を底本としている。

時戊申冬孟六日，生與日本國使臣周謙齋、櫟庵雪窓諸列赴京，越今年己酉夏至二十一日到京，宿於會同南館。候禮部諸當道下處分間，蒙欽賜謙齋等御宴，生見朝廷欽命柱國大臣親為同宴，足以見當今聖明厚待遠人之意，古云所敬者寡而悅此眾者，正此謂也。生不揣鄙陋，粗出數言，以表同來之意，呵呵。

天使乘軺下九重，會同設宴勝瀛蓬。(10)
庖龍烹鳳珍餚饌，盃牽相酬喜愛隆。
鼓吹聲中歌盛世，教坊樂裏賀來誠。
萬井衣冠朝帝闕，諸方異域盡來同。

淮山居士拜

正使
副使
一位大人 暨
居座雪窗列位大人　　煩偕韻擲來以為永恩耶

淮山居士は遣明使に明皇帝から御宴会を賜ったことを祝し、一首の詩作を送った。内容から見れば、策彦周良の漢詩と一致している。策彦周良の漢詩は以下の通りである。

賜筵宴之翌日，伴送官李大人作川八見寓賀忱，聊贅其韻以奉謝聖恩萬乙云
摩雲樓閣幾重重，知是紫宸移紫蓬。
卿棘公槐筵宴麗，樂花禮葉禁班隆。
沛然德雨涼天下，浩蕩恩波注日東。
正好清時揚側陋，山川雖異此文同。

また、書状の落款「煩偕韻擲來」からみれば、淮山居士の詩作は七言律詩であるはずだと推察される。しかし、詩作の韻から見れば、淮山居士の詩作は「東」韻における「重」、「蓬」、「隆」、「同」という漢字と「庚」韻における「誠」という漢字を使った。「東」韻と「庚」韻が通じないので韻律に合致しない。策彦周良の漢

(10) 岡本真氏・須田牧子氏の翻刻では「蓬瀛」とある。原文には「蓬」瀛」とあることによるが、劉雨珍先生の教示によってここでは「瀛蓬」とした。

詩は七言律詩であり、平声「東」韻を押し、同じ韻字である「重」、「蓬」、「隆」、「同」を使用した。故に、策彦周良の漢詩が淮山居士の詩作に次韻したものである可能性が高いと推察される。それに、淮山居士は伴送官李大人であるはずだと推察される。

李大人の書状における「戊申冬孟六日」は嘉靖二十七年十月六日であるので、即ち策彦周良が再渡明したときのことであった。『再渡集』によれば、伴送官は蔣文萃、李大人、周大人が担当したと分かった。嘉靖二十七年に、朱紈は浙江巡府に就任しており、中日勘合貿易の事務を処理したから、策彦周良など遣明使と直接的に接触したことがある。朱紈の文集である『甓餘雜集』において、今回の遣明使の上京について簡略に触れた。その記録は以下のようになる。

> （前略）臣謹以便宜處置，一面催督，委官寧波衛副千戸周世賢、寧波府照磨蔣文萃、知事李實、通事周文苑，管送夷使周良等五十員名起程。（後略）[11]

朱紈は周世賢、蔣文萃、李實を伴送官とし、周文苑を通事として策彦周良をはじめとする遣明使五十人を北京へ送らせ、派遣した。それでは、李大人は本名を李實、号を淮山居士というと推察される。

『再渡集』によると、遣明使が北京に到着してから、嘉靖二十八年五月廿七日に歓迎会を賜わり、勘合貿易に関する業務を行った後、同年七月二十七日に送別会を賜った。李氏の書状に言及した宴会は明側の礼部が業務を処理している間に行われた。即ち、今回の宴会は五月廿七日に賜った歓迎会であると分かるようになった。

策彦周良の返事である漢詩に目を向けたい。その詩題における「賜筵宴之翌日，伴送官李大人作川八見寓賀忱」から、李實の書状と詩作が五月二十八日に遣明使に送られたとわかった。残念だが、策彦周良がいつ漢詩を作って李實に返事したのか、不明である。

---

(11) 朱紈『甓餘雜集』巻4（『四庫全書存目叢書』集部第78冊．齊魯書社，1997年）p22

おわりに

『策彦入明記』によって、『謙斎南渡集』における漢詩の創作時間を判断しており、その創作背景をより深く全面的に理解できる。これに対して、『謙斎南渡集』における漢詩は『策彦入明記』に記録されていない内容を補充し、『策彦入明記』と共に策彦周良が遣明使として渡明した旅を更に全面的に記録したと言えるだろう。また、『謙斎南渡集』と『策彦入明記』における詩句の相違は誰によって、いつ、どのように生まれたのか？それに、『謙斎南渡集』における『策彦入明記』に記されていない漢詩は未だに一連の問題が残っているので、史料のさらなる発掘と解読を期待したい。

参考文献

岡本真・須田牧子「天竜寺妙智院所蔵『明国諸士送行』」『東京大学史料編纂所研究紀要』23
策彦周良『妙智院所蔵史料』東京大学史料編纂所，2007年
朱紈『甓餘雑集』『四庫全書存目叢書』集部第78冊．齊魯書社，1997年
高楠順次郎ほか編『大日本仏教全書第73巻 策彦和尚入明記』鈴木学術財団，1972年
牧田諦亮『策彦入明記の研究』上．仏教文化研究所，1955年